



基礎・基本を確実に身につけること

7月より、タイトルをマイナーチェンジしました。ホームページではカラーで見ることができます。

今は体育の授業では、プールでの授業（低学年は「水遊び」中学年は「浮く・泳ぐ運動」といいます。高学年は「水泳」です。）が中心です。水泳の学習で私が思い出すのは、白根□□小学校で受けもったS美さんのことです。

S美さんは、とてもおとなしくまじめな子で、体育が得意というタイプの子ではありませんでした。5年生で受け持ったときには、S美さんは全く泳げませんでした。泳げるようになりたいという彼女の思いと、私の正しい⁹⁾指導によって、授業の中で、浮くことを覚え、水の中での「のび」や水の抵抗が少なく進む形や正しいキックやストロークを覚え、素直でいい形の泳ぎを身につけていきました。夏休みの水泳教室^{※2}にも、休まず参加し、5年の夏の終わりには25mを泳げるようになりました。

S美さんは、6年になると、泳ぎに磨きがかかり、水泳記録会^{※1}では25m自由形に出場しました。そして、なんと!! 3支会（白根・八田・芦安の6小学校）で1位となったのでした。5年の始めは全くのカナヅチだった子が6年の記録会で1位になるとは…。S美さんの保護者や私もびっくりしましたが、何よりS美さん自身がびっくりしていました。

我流で泳ぎを覚え、変なクセがつくとなかなか直せないものですが、S美さんの場合は全く泳げないところからの出発だったので、泳ぎの基礎・基本を身につける段階から始まり、理想的なフォームへと進化していった成果でした。



※1 水泳記録会…今では行われていませんが、以前は球技会や陸上記録会だけでなく、支会や班の6年生が集まって水泳の記録会も行われていました。

※2 水泳教室 …各学年で、または全校で、夏休みに数日、水泳が苦手な子を対象としたものや、記録会のある6年生を対象としたものなど、教師が指導する水泳教室も行う学校が多くありました。

このことは水泳の学習に限らないことは理解いただけると思います。

全ての学習において基礎・基本を確実に身につけてこそ、その後の成長・発展・進化があるのです。

…もちろん、生活においても、基礎・基本は大切で、必要です。

小学校へ入学する前に、字が読めたり書けたりすることを自慢する場合があります。100まで数えられる、たし算ができると自慢する子もいます。子どもの向学心や好奇心は大事ですが、早く覚えたからといって、天才でも秀才でもありません。入学したときに、ひらがなが読めるというのはまだいいとしても「ボク書ける!」と言っている子ほど、字の形も筆順もメチャクチャで、それが定着してしまっていて、それを直すのに私たちは労力と時間がとてもかかるのです。数にしても「風呂場勘定」といわれる「100まで数えて上がりなさい」という覚え方をして、入学前に50とか100といった数が登場するのです。現在1年生は「10と3で13」というような学習をしているのですが…。高学年でも、小数や分数の計算を塾などで教わって、学校で学ぶ時期よりも早く「覚えて」いる子もいます。先に「教わって」いるだけで、特に賢いわけではないのですが、周りの子に尊敬のまなざしで見られることがあります。しかし、それは一時のことで、みんなで学習を始めるとすぐ追いつきます。**基礎・基本を確実に身につけている子は、学習を楽しみ、授業を楽しみ、学校での授業の学習進度で十分にのびるものなのです。**

<おまけ…矛盾していること>

そうはいうものの、子どもたちの生活と学習の間には、いろいろな矛盾があります。学校で学習する前に、意味も分からず、目や耳にしたり、覚えてしまったりするものが多くあるのです。小数を学習する前の低学年でも、身長は「□□.□cm」と、小数であり、長さである数値を耳にしています。体重も「〇〇.〇kg」と小数であり、重さである数値を目にします。靴のサイズでも「23.5cm」「23.0cm」という数値も聞いているはず

…しかも「23.0」という言い方は特殊形で、授業では小数点以下が0なら、23.0とはせず、小数点以下は消去して「23」とすることから学習します。

見聞きするうちに、学校で学習する前の子どもたちの中に、「小数」や「長さ」や「重さ」の勝手な概念ができてしまっていることもあるのです。それを改めて学習することは実はヤッカイなことなのです。

それとは逆に、自分の名前の漢字を国語で学習するまで書かないなどとやっていたら、小学校を卒業するまで自分の名前を漢字で書けない子がたくさん出てしまいます。これも矛盾です…。こういった矛盾との折り合いがうまくつかないものかと思いますが、難しいことです…。



職員の一部に好評のため…、またしても父と子のコラムです。

息子に少し追い越された日

見る見るうちに皿が重なっていく。なあ、もう少しゆっくり食べたらどうだい。
今、息子（中2）と駅前の回転寿司に来ているのだ。

妻が外出、今日は男2人で夕食だ。たまには奮発して寿司でもとるかという私の提案に、息子は、
「うーん、回転寿司がいいな。」

なかなか親思いの子どもだと感心したのが甘かったか。
食べ盛りというのはこういうものかと改めて驚かされた。
流れてくる皿を次々ととっては見事に平らげる。時折、
「コハダとイワシも下さい。」

などと生意気なことまで口にする。そのくせ、
「あのさ、ウニもとっていい？」
などと聞くとところが泣かせるじゃないか。



そういえば、前に息子とこの店に来たのはいつだったろう。ついこの前のような気もするが、確か2、3皿食べてすぐにプリンだゼリーだと欲しがったのをたしなめた記憶があるから、それもずいぶん前だったのだろう。早いもんだな…。

帰り道、やけに隣の影が長く見えて横を向くと、
その影の持ち主の肩が自分よりほんの少し高くあることに気づいた。
なんとなくシャクな気がして（しかし同時に「悪くないな」という微妙な感じもあったのだが）
私はいくらか早足で少し先を歩いた。

家が近づいてくると、背後からヤツがこう言った。

「ねえ、あとでちょっと腹減りそうだから、そこのコンビニでおにぎりでも買おうよ。」

「花王」新聞広告欄より

我が家も息子2人が食欲旺盛のころは、回転寿司に行くと一家4人で1万円を超える出費でした。
妻曰く「あなたの飲んだビールが一番高いだけだね！」 いやはや…何とも…